

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11866

研究課題名（和文）都市における“死別を支え合うコミュニティ”を育むプログラムの開発

研究課題名（英文）An Education Program for Local Community Residents on How to Cultivate a Community Supporting Spirit in the Face of Bereavement

研究代表者

小野 若菜子（ONO, Wakanako）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：50550737

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域住民を対象とした都市における“死別を支え合うコミュニティ”を育む教育プログラムを試行・評価することを目的とした。研究デザインは、自己対照デザインによる介入研究であった。プログラム内容は、講義、グループワークであった。研究参加者は38名（女性30名、男性8名、平均年齢71.8歳）であった。プログラム内容、参加者どうしの交流に「満足だった」が約9割であった。研究参加者は、自分の地域活動や死別サポートの経験に意味を見出していたことから、地域で死別を支えた経験を共有する機会を提供することは重要であると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在宅での看取り体制を構築するには、家族や近隣の人々といったインフォーマルな支援、住民の理解や協力といった地域基盤の形成が課題である。本研究では、住民を対象とした“死別を支え合うコミュニティ”を育むプログラムを実施した。参加者の学びや活発な意見交換の場になっていた。“死別を支え合うコミュニティ”や地域の見守りについて、こうした住民相互に話し合う機会を設けていくことは重要である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to evaluate an education program for local community residents on how to cultivate a community supporting spirit in the face of bereavement in a large city in Japan. We used a longitudinal one-group pretest-posttest study design. The participants were 30 women and eight men with an average age of 71.8 years. About 90% answered that they were “very satisfied” or “satisfied” with the overall program and exchanges among the participants. The participants found meaning in their community activities, and they shared experiences provided support during their bereavement. It is important to provide sharing opportunities within the local community to support each resident in the face of bereavement.

研究分野：在宅看護学

キーワード：死別 都市 コミュニティ プログラム開発 地域包括支援センター 住民

## 1. 研究開始当初の背景

これからの日本の少子高齢社会の介護や看取りをどう支えるのか。介護保険制度においても身近な生活圏(中学校区等)で、地域包括ケアシステムをいかに構築するかが課題とされている。2012年、国は「在宅医療・介護あんしん2012」(厚生労働省医政局指導課在宅医療推進室)を打ち出し、住みなれた自宅や介護施設等、患者が望む場所での看取りを推進し、在宅医療体制の整備を進めている。

しかし、日本の都市の特徴として、高度経済成長の時代から、会社や家族というコミュニティを単位として活動してきた結果、地域や近隣との関係性の希薄化、社会的孤立が今日的課題となっている。地域や近隣との関係性の希薄化、家族によるサポート力の弱まり、社会的孤立といった都市の課題は、死別に遭遇する人々にも悪影響を及ぼすと考えられる。人々がお互いのつながりを意識しながら、“死別を支え合うコミュニティ”をつくり、死別を語り支え合う風土や文化を養うことは、お互いを思いやるまちづくり、人々の健康の維持・増進につながるであろう。

訪問看護師が行うグリーフケア(遺族ケア)は自宅訪問や電話サポート等の個別ケアが中心であり(小野,2011a)、死別に関わる看護の専門性を生かした死別前後のグリーフケアが提供されていることがわかった(小野,2011b)。しかし一方で、看護職の個別ケアの提供だけでは、在宅での看取りやグリーフケアの提供には限界がある。人々が死別を乗り越えるためには、“死別を支え合うコミュニティ”といった地域基盤が影響力を持つ。

そこで本研究では、現代の“死別を支え合うコミュニティ”の創造に向けて、都市における“死別を支え合うコミュニティ”はどのようなものか調査し、その結果をもとに“死別を支え合うコミュニティ”を育むプログラムを開発することを目的とした。本研究により、高齢社会における地域包括ケアシステムの基盤となる地域づくり“死別を支え合うコミュニティ”の都市型モデルを提示することができると考えられる。

## 2. 研究の目的

(1) インタビュー調査：死別を経験する家族を支えた地域の人々の関わりがどのようなものかを探索し記述する。

(2) 質問紙調査：地域包括支援センターに対して、質問紙調査を実施し、地域における死別サポートの現状と課題を探究する。

(3) 教育プログラムの試行・評価：地域住民を対象とした都市における“死別を支え合うコミュニティ”を育む教育プログラムを試行・評価する。

## 3. 研究の方法

(1) インタビュー調査：半構造的インタビューによる質的記述的研究であった。研究協力者は、都市部のA市区町村において、地域活動に携わり、近隣の死別の相談を受け、見守ったことのある住民、もしくは、公的機関等に勤務している職員であった。質的記述的にインタビューの内容分析を行った。

(2) 質問紙調査：研究者が作成した質問紙を用いて、地域包括支援センターに対して、郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した。対象は、1つの地域包括支援センターごとに、そのセンターに1年以上勤務する社会福祉士、保健師・看護師、主任介護支援専門員のいずれか1名とした。

(3) 教育プログラムの試行・評価：研究デザインは、自己対照デザインによる介入研究

であった。プログラム内容は、講義、グループワークであった(1回、2時間)。評価は、プログラム前後の無記名自記式アンケート、直後のグループインタビューを行った。量的データは、変数ごとに統計量を算出した。質的データは、逐語録から内容分析を行った。

#### 4. 研究成果

(1)インタビュー調査:死別を経験する家族を支えた地域の人々の関わり(小野,永井,2018)  
結果

研究協力者は13名、平均年齢は69.7歳であった。死別を経験する家族を支えた地域の人々の関わりとして、【助けを求められる地域の関係をつくる】【広くみんなの幸せを願いながら人と関わる】という、いざという時に助けを求められる地域の形成に取り組みられていた。そして、【療養者の介護をする家族を支える】【療養者を見送る中で家族を見守る】という療養から死までの見守りがなされていた。死後しばらくしてからの関わりとして、【家族のその後の生活を見守る】【家族の心情に添って関わる】ことがあった。

##### 考察

長年の顔見知りの関係性が信頼関係に発展することで近隣の死別を見守るという交流が生じていた。療養や葬儀の見守りを通して近隣の人々がつながる機会にもなる。今後、住民や地域活動に携わるキーパーソンに対して、死別やその支援に対する啓発活動を行い、死別に遭遇する家族を支える地域の育成を促進することが大切である。

(2)質問紙調査:死別を支え合う地域コミュニティの形成に関する全国質問紙調査(小野,永井,2019a, 2019b)

##### 結果

質問紙の有効回答は、738 (29.5%)であった。死別に関する相談を受けたことが「ある」は、472(64.0%)であった。*t* 検定の結果、死別相談を受けたことがある地域包括支援センターの特徴は、市区町村人口が多く、終末期患者のカンファレンスやデス・カンファレンス、市民向けの看取り・死別の事業を実施している傾向があった。

死別を支える地域コミュニティ尺度は、3つの下位尺度毎の探索的因子分析を行った結果、(1)助け合える地域コミュニティの形成尺度は(a)近隣の見守りと地域活動参加、(b)死別サポートの存在と利用の2因子、(2)療養中から死別までの関わり尺度は(a)療養者・家族への関わり、(b)別れの儀式への参加の2因子、(3)死別後の遺族への関わり尺度は(a)遺族の健康の見守り、(b)遺族の相談や手伝いの2因子で構成された。死別を支える地域コミュニティのアウトカム尺度は、(a)死別を支える地域の形成、(b)遺族の病気・死の予防と生活の維持、(c)死別を支えた市民の充実感と意欲、(d)遺族の近隣との交流と地域への愛着の4因子で構成された。各因子のクロンバック  $\alpha$  は、0.77-0.94であった。

##### 考察

地域活動が活発な地域では、住民が死別に遭遇した際にも住民相互のサポートが生じる可能性が考えられた。また、地域包括支援センターでは、死別サポートの取り組みが見られ、今後、死別サポートの社会資源としての役割が期待される。

(3)教育プログラムの試行・評価:都市における“死別を支え合うコミュニティ”を育む教育プログラムの開発(Ono, Nagai,2020)

##### 結果

研究参加者は38名(女性30名,男性8名,平均年齢71.8歳)であった。近隣の死別サポートの経験がある人が18名(47.4%)であった。プログラム内容、参加者どうしの交流に「満足だった」が約9割であった。グループインタビューの結果、「死別を支えるコミュニティは身近なつながりから生じる」「コミュニティにグリーフサポートが存在してもよい」等の意見があった。

#### 考察

研究参加者は、自分の地域活動や死別の経験に意味を見出していたことから、“死別を支え合うコミュニティ”について話をする機会は重要であると考えられる。

#### <文献>

厚生労働省医政局指導課在宅医療推進室．在宅医療・介護あんしん2012．厚生労働省ホームページ．

[http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/iryuu/zaitaku/dl/anshin2012.pdf](http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/zaitaku/dl/anshin2012.pdf) [2014年9月25日]

小野若菜子(2011a)．訪問看護ステーションにおける家族介護者へのグリーフケアの実施に関する全国調査．日本在宅ケア学会誌，14(2)，58-65．

小野若菜子(2011b)．家族介護者に対して訪問看護師が行うグリーフケアとアウトカムの構成概念の検討．日本看護科学会誌，31(1)，25-35．

小野若菜子，永井智子(2018)．死別を経験する家族を支えた地域の人々の関わり．日本地域看護学会誌 21(2)，40-48．

小野若菜子，永井智子(2019a)．死別を支え合う地域コミュニティの形成に関する全国質問紙調査．第7回日本公衆衛生看護学会学術集会講演集，154．

小野若菜子，永井智子(2019b)．地域包括支援センターの死別サポートと地域特性に関する全国質問紙調査．日本エンドオブライフケア学会第3回学術集会．

Ono W, Nagai T(2020)．An Education Program for Local Community Residents on How to Cultivate a Community Supporting Spirit in the Face of Bereavement．The 6th WANS．

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野若菜子, 永井智子	4. 巻 21(2)
2. 論文標題 死別を経験する家族を支えた地域の人々の関わり	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌	6. 最初と最後の頁 40-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野若菜子	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 【グリーンケアを考える-終末期のケアから、地域への働きかけまで】 地域に根差した看護職が行なうグリーンケア 「死別を考える」思いやりのあるまちづくりをめざして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 訪問看護と介護	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小野若菜子, 永井智子
2. 発表標題 地域包括支援センターにおける死別サポートの現状と課題
3. 学会等名 日本地域看護学会第21回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野若菜子, 永井智子
2. 発表標題 死別を支え合う地域コミュニティの形成に関する全国質問紙調査
3. 学会等名 第7回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野若菜子, 永井智子
2. 発表標題 都市部における死別を支え合う地域コミュニティ
3. 学会等名 第5回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ono W, Nagai T
2. 発表標題 An Education Program for Local Community Residents on How to Cultivate a Community Supporting Spirit in the Face of Bereavement
3. 学会等名 The 6th WANS
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野若菜子
2. 発表標題 指定集会 地域看護職が行うグリーンケア
3. 学会等名 日本地域看護学会第23回学術集会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	永井 智子  (NAGAI Tomoko)		